

しずおか新聞感想文コンクール

最優秀賞

- ▽小学生の部(静新会会長賞)
新村知己(静岡大学付属浜松小6)
- ▽中学生の部(静岡新聞社賞)
高橋有珠(静岡大学付属浜松中2)
- ▽高校生の部(静岡県教育長賞)
遠藤有人(韮山高2)

優秀賞

- ▽小学生の部
松下ちひろ(静岡市立葵小5)
牧野瀬叶葉(浜松市立中郡小5)
島村和希(静岡市立大里西小5)
- ▽中学生の部
石切山未羽(静岡大成中3)
浦野彩花(島田市立島田第一中1)
- ▽高校生の部
中西野々香(桐陽高3)

入選

- ▽小学生の部
原田耀(静岡市立葵小5)
古沢春(静岡大学付属浜松小6)
- ▽中学生の部
加藤優佳(浜松市立開成中1)
沢米梨々子(浜松市立曳馬中2)
- ▽高校生の部
奥村実矢(浜松西高1)
小倉明希菜(浜松市立高2)

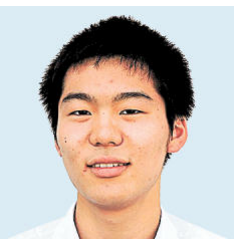
「2019年度しずおか新聞感想文コンクール」(静岡新聞社・静岡放送主催、県教委、県私学協会など後援、静新会協力)の審査結果が発表された。応募総数は7472点。小学生、中学生、高校生の3部門で審査が行われ、最優秀賞にはそれぞれ静岡大学教育学部付属浜松小6年・新村知己さんの「大阪サミット海洋プラごみ対策宣言と僕」、静岡大学教育学部付属浜松中2年・高橋有珠さんの「心の壁を超えて」、静岡県立韮山高2年・遠藤有人さんの「優生思想と社会への思い」が選ばれた。

学校賞(団体賞)は応募作品数などを総合的に選考し、小学生の部から2校、中学生の部から8校、高校生の部から3校が決定した。



最優秀賞

高校生の部(静岡県教育長賞)



優生思想と社会への思い

えんどう ゆうと
遠藤 有人さん
2年 韮山高

僕が「優生思想」という得体的知らない言葉を初めて知ったのは、約三年前の障害者施設「津久井やまゆり園」で起きた殺傷事件のときだ。犯人が語ったというヒトラーの思想、これが人間を優秀で分け、優れた人間のみに存在を認めるという「優生思想」だった。家族の中に障害者をもつ僕としては、当時、かなりの憤りと恐怖を感じたものだが、まだまだ、ヒトラーも犯人もある特定の思想をもつ特別な人物という認識しかなかった。

まさか憲法で基本的人権の尊重が定められ、自由と権利

が守られているはずのこの現代の日本で、僕が生まれるほんの数年前まで国家が制定した障害者に不手先を強制する「優生保護法」という法律が存在していたことは、千言万語を費やしてもこの衝撃を言い尽くし難い。どこに人権が、どこに自由があるというのだ。やっと謝罪と救済が始まったといえども、すべてを踏みしめられた被害者の痛みは想像を絶するものがあるはずだ。当時としては、戦後の食糧不足の中、よかれと思って作られたという。今現在の感覚では、正気の沙汰かと思じられないというのが正直な

思いだ。現代の社会では、当然であったり仕方のないことと思われていることが、近い将来、時代や政治が変わる中で実はあまりにも残酷なことであったということが多々あることは、歴史も証明し、そして今回の記事によって改めて思い知らされた。そして、社会や国家の勝手な都合や思惑により攻撃の的とされるのは、常に社会的弱者なのだ。

さらに驚いたことに、この法律と共に生きてきたはずの祖父母、両親とも全くこのような法律が存在し施行されていたことを知らなかったこと

不可欠なのだ。記事の中で、「今なお内なる優生思想は存在しないか」と問いかけている。僕はある種の優生思想が社会に息づいているように思う。ますます進化を遂げる出生前診断で、異常確定九割が中絶だと聞く。いろいろな事情や考え方があり、判断は個人の自由が前提だが、障害者の生活を知

中学生の部(静岡新聞社賞)



心の壁を超えて

たかはし
高橋 有珠さん
2年 静大付属浜松中

あれっ？私が思っているのとは違う。地下鉄の階段で助けてもらった体験に感動して日本に来たという、車椅子のグリスデイルさんの記事を見て、率直にそう思った。なぜなら、実際に公共交通機関で席を譲ったり、誰かを助けたりしている日本人には、あまりお目にかからないからだ。むしろ、家族旅行で行った台湾と韓国車内で、現地の若者やカップルがごく自然に祖母と弟に席を譲る姿が新鮮で、日本人も同じようにスマートな行動が出来ればいいのにとささ思っていたほどだ。

通学に電車を利用する私は、駅員が乗客に分りやすい行き方を教えたり、丁寧にトラブルに対応したりする場面を時々見かける。グリスデイルさんの体験も、このような職務行動の一環である。外国人から「日本のサービスは質が高い」と言われるのは、こうした勤労丁寧な仕事ぶりが評価されているのだが、その一方で、個人として親切な行動をとる国民は、非常に少ないと常々感じている。

この違いは一体何だろうか。一つには国民性が関係しているのではないかと思う。

夏休みに目撃した光景が良い例である。それは、旅行で行った京都の電車内で、中年の女性が高齢の婦人に席を譲ろうとしたが、「私はすぐ降りるから、大丈夫です」と断られたというものだ。せつなく勇気を持って行動しても、相手から「老人扱いされたくない」「そんなに不自由してないのに、失礼ね」という態度を取られると、日本人は委縮してしまい、次からは声を掛け躊躇してしまう。反対に、席を譲られる立場になった時にも、変なプライドが邪魔をして、素直に応じることが出

来ない。さらに、横並びの「普通であること」に大きな価値が置かれ、障害のある人を異質なものと見てしまう傾向がある。外国は、障害者も一つの個性と捉え、社会全体で受け入れる土壌があるから、自然な対応が出来るのではないかと感じる。

東京オリンピック・パラリンピックの開幕まで一年を切った。外国のホテルに行くとき、サービス料がかかる割に、従業員が必要最低限の仕事しかないなど、不親切に感じることが多い。それに比べて、日本の旅館やホテルは確かに

小学生の部(静新会会長賞)



大阪サミット海洋プラごみ対策宣言と僕

しんむら
新村 知己さん
6年 静大付属浜松小

G20大阪サミットの首脳宣言の新聞記事を読んだ。やや期限が近いのではないかと感じた。しかし、多くの国との共同作業なので、そうテンについて学校で、また、独自に勉強してきたからだ。

新聞一面の記事を読むと、「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」という大目標の設定が目に入った。二〇五〇年までにプラごみによる追加的な汚染をゼロに削減すること

を指すというのだが、やや期限が近いのではないかと感じた。しかし、多くの国との共同作業なので、そうテンについて学校で、また、独自に勉強してきたからだ。

さて日本としては、このビジョンを実現するためにどうしていくのか。新聞には、具体例が書かれていなかった。で、外務省のホームページを見てみた。すると、「MARINE・イニシアティブ」という言葉が出てきた。詳細を見ると、環境省の海洋プラスチックごみ対策アクションプランを国際的な視点からまとめ直したものであることが分

かった。対外的に日本の活動をアピールするという点で良い方策と思われた。

最後に僕自身の取り組みについて考えてみた。一つ目は海洋プラごみ問題の知識をより深めることだ。最近「アジアのおなかからプラスチック」という本を読み、自分も問題点を再考してみた。海洋生分解性プラにも興味がある。二つ目は海洋プラごみ拾



静岡新聞6月30日朝刊



静岡新聞8月21日朝刊

社会のあり方 力強く主張



今年どのような作品に出会えるのか、とても楽しみにしていた。

全ての作品に共通していることが一つあります。それは、現在を見つめ、過去を振り返り、未来を考え、世の中はどうあるべきか、これからの行動するべきか、社会のあり方や、自分を含む人間の生き方について、主体的に力強く主張していることでした。

高校生の部の新村知己君は、G20サミットでの宣言内容を熟読し、地球レベルでの対応が急務であるべき環境問題の取り扱いが低い

ことに批判と懸念を表明します。そして日本独自の取り組みを調べ、積極的に評価したうえで、自分自身の環境問題への取り組みについて、「地球の一員」というグローバルな視点を盛り込みながら簡潔かつ説得的にまとめている。文章構成力も高い力作です。

中学生の部の高橋有珠さんは、バリアフリーに関する記事の内容と自分の身近な経験事例との対比という鋭利な切り口から、日本人



作品について意見を交わす審査員＝静岡市駿河区菅田の静岡新聞放送会館

講評

審査員長

三科 守

(静岡県立中央図書館長)

の、「仕事」と「プライベート」での他者への関わり方・心配りの違いについて論じ、海外での実体験も交えながら、日本人の特性にまで考察を深めます。それを踏まえ、日本人の国際化への対応としての「心のバリアフリー」「見えない壁」という課題とその解決について具体的に提言する、論理的で表現力豊かな文章です。